



「『ひきこもり』の解決と対応」に 関する政策提言書

令和 7 年 10 月

名取市議会 民生教育常任委員会

1 検討テーマ

「ひきこもり」の解決と対応について

2 調査に取り組む課題の選定と方向性

本常任委員会では、実効性のある政策提案を行うことを目的に活動するという方針を掲げ、令和7年度は、令和6年度に引き続き「ひきこもり」への対応を調査対象とし、調査の過程において政策提言対象事案とした。令和6年度政策提言を行った「不登校問題対策」から連綿と続いていると言っても過言ではない共通の課題やさらなる経年による事態の深刻化など実態を調査し、その解決の糸口を見つけ出すために調査を行った。

3 調査内容及び検討経過

(1) 滋賀県湖南市「ひきこもり支援ステーション事業」

湖南市では、平成14年から市独自の「発達支援システム事業」に取り組み、「早期発見・早期対応をキーワードにした障がい児支援のあり方」について研究しており、実績もある。その支援システムと並行する形で、平成21年度から「ひきこもり地域支援センター」さらに段階的な充実をはかるため令和6年度から「ひきこもり支援ステーション事業」が開始された。

湖南市の引きこもりの推計数はおよそ660人（人口53,879人）である。

①事業実績（令和6年度）

相談件数実人数	92人
延べ件数	310件

②相談支援の状況

- ・相談の大半は家族から
- ・当事者のニーズが明確でないため、面談が長期化
- ・親亡き後の心配や「就労してほしい」という希望
同級生との比較 家族だけでは解決できない

③居場所支援の状況

- ・新しい居場所の創出
- ・参加者が新たな参加者を支える側になる意識の芽生え

<居場所支援の方針>

ひきこもり支援は、個別性が高く、息の長い支援が求められる。個別ニーズに応じた多様な支援の受け皿が必要である。

地域の中で、本人がアクセスしやすく、安心して過ごせる居場所・交流の機会を充実させる。

④体験活動による支援の状況

- ・はたらく体験（そばの実選別）
- ・地域生活支援事業
(地域活動支援センター I型、サロン事業：8回／月)

⑤ネットワークづくりの状況

- ・コア会議 定例開催：1回/月
支援の検証、情報共有、課題整理
- ・関係機関連携会議
 - i) ひきこもり当事者（家族を含む）支援方針の検討
 - ii) 支援者を孤立させない体制づくり
 - iii) 地域課題の整理
 - iv) 情報交換

⑥ひきこもり支援の重視すべき視点

- ・「課題解決型支援」と「伴走支援」のアプローチ

家庭内の変化を早期にキャッチし、支援機関等へつなぐ仕組みづくり

相談者の来所が中断したり、本人や家族のニーズが見えず、終結になるなど、相談者と支援者のつながりが途絶えてしまわないような仕組みづくり

- ・「専門的支援」と「側面的支援」

ひきこもり状態理解、アセスメント、見立て、医療の必要性の判断に加え、家族全体を捉えた課題や支援の方向性の検討

(2) NPO法人わたげの会「フリースペースなとり」

令和2年から県のモデル事業として名取市増田にて開所した。

本来、3年の期限付きであったが、コロナ禍で若干開所が遅れたため、また、事業の有効性及び必要性から一回延長されたが、令和7年度で終了ということになっている。県としては市町村の受け皿を探す方向で進めているようだが、未定である。

NPO法人わたげの会の本拠地は仙台市太白区にあり、29年間フリースペースを実施している。また社会福祉法人格し、グループホームや就労継続支援B型相談支援事業所なども運営している。

わたげ全体で言えば、すでに何千人の卒業者がおり、それぞれ居場所を見つけて今を生きている。そこに至るまでの道のりで、どこで、どのように、どんな支援につなげられるか、私たちは、それをつないでいく一人でなければならないのではないかと考えた。「皆さん、空白が怖い。遅れていると考えてしまう。」「親との面談も重要。親が離したがらないケースもある。本人の未来を考えるべき。」「20代から30代、40代、50代はすぐ来る。」「もっと職員が必要。」「訪問スタッフも欲しい。」「若い男性スタッフも必要、ボランティアだけでは困難。」等々、多くの御要望をいただいた。

※名取市での実績及びわたげの組織全体については別添資料参照

4 提言する政策

湖南市においては、ひきこもり支援ステーション事業の開始からはまだ1年であるが、社会福祉法人さわらび福祉会の協力による「ひきこもり者と家族を結ぶ公私協働による地域づくり事業」が平成29年度から行われており、活動集と実例集を拝見した。そこには、根気強い聞き取りの成果によるひきこもり生活のリアルがある。

「どうしたらひきこもりを理解してもらえるか、本人が何を求めているのか、どのような支援が可能か…」

なかなか出口の見えない葛藤の中に、いかに光を見出すか。万能薬は存在しないが、どの事例も他人事ではなく、本市にも明らかに存在する課題として、委員会としてもさらに身近な事例を学びつつ、少しでも前進できる方策を提言したいという、委員会としての方向性をまとめた。

その身近な事例が、数多くの実績を持つ「フリースペースなとり」であった。市役所の至近にありながら、初訪問であったことは、反省するところである。実績からも分かるとおり、少なくない方々の居場所となっている(名取市民もいる)実状を鑑みるに、また、仙台市太白区八本松にあるNPO法人わたげの会との交通利便性もよく、現在の場所での存続を法人、利用者が希望していることからも、次年度以降存続のため、本市が受け皿となるべく可及的速やかに前向きな検討を行い、次年度の予算編成に向けて具体的に方策を見出すべきという結論に達した。

5 添付資料

- (1) 湖南市管外行政視察報告
- (2) 名取市での実績及びわたげ全体組織

管外行政視察報告書

報告者：長南 良彦
阿部 正義

【視察先】滋賀県湖南市

【日 時】令和7年7月1日（火）13：30～15：30

【場 所】滋賀県湖南市役所

【人 口】53,879人（令和7年4月1日現在）

【面 積】70.4平方キロメートル

【概 要】湖南市は、滋賀県南部に位置し、大阪と名古屋からそれぞれ100km圏内にあり、近畿圏と中部圏をつなぐ広域交流拠点にある。

南側に阿星山系を、北側に岩根山系を望み、これらの山々に囲まれて、地域の中央を野洲川が流れている。野洲川付近一帯に平野が開け、水と緑に囲まれた自然環境の恵まれた地域である。地形は、平地・丘陵・山林に分かれ、特に山林が全土地面積の5割強を占めている。

古くは近江と伊勢を結ぶ伊勢参宮街道として発展し、江戸時代には東海道五十三次の51番目の石部宿が置かれ、これを中心とした街道の産業や文化が栄えた。現在は名神高速道路の栗東湖南インターチェンジ、竜王インターチェンジ等を活用した県下有数の工業団地が立地し、地域経済の発展に大きな役割を果たしている。

国道1号とJR草津線が地域を東西に走り、三雲・甲西・石部の3駅がある。これらの交通基盤によって、京阪神の都市圏への通勤・通学に便利な立地となり、ベッドタウンとして住宅地開発が進んだ。

奈良時代の昔から現代に至るまで、常にこのような交通の要衝として発展し続け、さらに気候が温暖な上に、野洲川を中心を開けた平野に恵まれたこともあって、さまざまな産業と文化を育んできた。

（参考資料：「令和7年湖南市議会概要」から抜粋）

【調査内容】

湖南市ひきこもり支援ステーション事業について

*説明者

湖南市健康福祉部障がい福祉課

- ・ 課長 木田 縁 氏
- ・ 課長補佐 堀 早苗 氏

1. ひきこもり把握数と体制

(1) ひきこもりの現状

2024 (R 6) . 1. 1 現在「内閣府人口推計季報」に基づく

【 ひきこもり推計数 】

全国 約 146 万人

県内 約1万6千人

市内 約 660 人

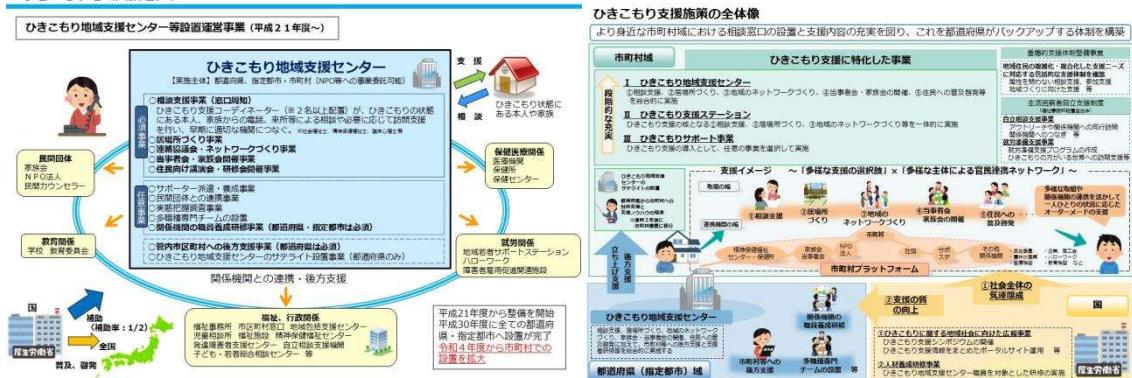
【 相談状況からひきこもりの把握数 】

92人 令和5年度 庁内関係課会議

→ 104 人 令和 6 年度

(2) 滋賀県での取組

ひきこもり地域支援センター



- 滋賀県の中でひきこもりの位置づけを検討
 - 県内に8種類の相談窓口を設置
 - ① 民生委員等
 - ② 市町
 - ③ 市町社会福祉協議会
 - ④ 県社会福祉協議会
 - ⑤ 相談支援事業所等 ←湖南市の「ひきこもり支援ステーション事業」
委託
 - ⑥ 保健所
 - ⑦ ひきこもり支援センター
 - ⑧ 民間支援団体等
 - 湖南市のひきこもり対策関連の取組
 - ・重層的体制整備事業
 - ・生活困窮者支援事業

2. ひきこもり支援ステーション事業

(1) 事業実績（令和6年度）

相談件数実人数 92人
延べ件数 310件

(2) 相談支援の状況

- 相談は圧倒的に家族からが多い
- 当事者のニーズ「これからどうしたいのか」がはっきりしないため、面談が長期化している
- 家族は焦っていることが多く、親亡きあと心配や働いてほしい、同級生との比較などにより、家族だけではどうすることもできないが、そのペースで支援が進められない

(3) 居場所支援の状況

- 新しい居場所の創出
- 参加者が新たに参加する当事者を支える側になる意識の芽生え

<居場所支援の方針>

ひきこもりの支援は、個別性が高く、息の長い支援が求められる。支援の段階や個別ニーズに応じて、多様な支援の受け皿が必要であり、地域の中で本人が アクセスしやすく、安心して過ごせる居場所・交流の機会を充実させる。

(4) 体験活動による支援の状況

- はたらく体験（そばの実選別）
- 地域生活支援事業（地域活動支援センターI型、サロン事業：8回/月）

(5) ネットワークづくりの状況

- コア会議 定例開催：月に1回
事例検討を通した支援の検証、情報共有と課題整理
⇒目指すべき姿の共有
- 関係機関連携会議
 - ① ひきこもり当事者（家族含む）支援方針の検討
 - ② 支援者の孤立させない体制づくり
 - ③ 地域課題の整理
 - ④ 情報交換

<会議テーマ>

令和6年12月24日

「支援期間の長期化と「8050」問題へのアプローチの仕方について」

令和7年2月6日

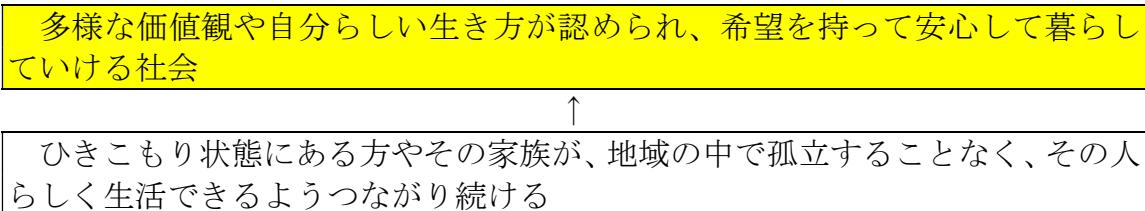
「発達支援システムにのらなかつた30代ひきこもりの検証」

「教育部局との連携のあり方について」

(6) ひきこもり支援の重視すべき視点

- 「課題解決型支援」と「伴走支援」2つのアプローチ
家庭内の変化を早期にキャッチし、支援機関等へつなぐ仕組みづくり
相談者の来所が中断したり、本人や家族のニーズが見えず終結になるなど、相談者と支援者のつながりが途絶えてしまうことがないような仕組みづくり
- アウトリーチ支援の充実
息の長い支援ができる仕組みづくり
- ひきこもり状態を長期化させない視点
ひきこもり状態の予兆を早期に把握、先を急がない継続可能なアプローチ
- 「専門的支援」と「側面的支援」
ひきこもり状態理解、アセスメント、見立て、医療の必要性の判断に加え、家族全体を捉えた課題や支援の方向性の検討

(7) ひきこもり支援の目指す姿



3. 質疑応答

Q：本人と家族のニーズの差についての考え方。

A：基本的に、本人と家族の支援は別の支援者が対応する。

重視すべき視点で2つのアプローチの1つ「伴走支援」が本人への支援である。本人との信頼関係を築いて自律するまで寄り添う。精神的専門性の高い職員の対応が不可欠。重視すべき視点のアプローチのもう1つ「課題解決型支援」が家族支援に当たる。家族に寄り添った支援を行っている。

Q：将来的な事業の拡大は考えているのか。

A：事業規模の継続、拡大などは、今後の事業評価の中で検討していく。

Q：ひきこもりになった傾向は捉えているのか。

A：全てを把握しているわけではないが、幼少期から、高校受験がきっかけだったり、就職を機にひきこもりになる等の事例がある。
対人面を苦手に感じている方が多いと感じる。

Q：これまでの取組の中で、自律まで至った方のきっかけは何かあったのか。

A：再度、社会に一歩踏み出すのに臆病になっている。一般就労等の社会復帰に至るまでは、一旦、自宅から外に出てみるといった中間点、例えば、訓練給付等の期間に、本人が自分の強みなどを見つめ直すことが大切である。

Q：ひきこもりの市内推計数 660 人、相談件数実人数 92 人で、潜在数は約 550 人ほどいる。市の支援を周知するといったアプローチは。

A：ひきこもりの相談窓口は無かったが、この事業をこれまで行ってきて 14 人が新たに掌握できた。広報やホームページなどを活用し、支援の中で、必要な方に必要な情報が届き、窓口相談から支援までつなげられるよう努める。

Q：広報やホームページ以外の周知方法は。

A：直接の窓口相談からだけではなく、市の一般業務から把握し支援につなげるといった事例もある。

Q：本人との対話につなげるためのアプローチとして、手紙やメール、面談を行っているが、他の方法でのアプローチはあるのか。

A：場所や方法についても、本人の意向に可能な限り寄り添って行う。

Q：相談支援の状況として電話が大半であるが、どのような支援なのか。

A：多くの場合、本人と会うこと自体が難しいので、電話でなら対応できることが多いものと捉えている。

Q：ひきこもり支援ステーション事業の居場所づくりはあるのか。

A：今年度から月 2 回、施設内外で行っている。古民家や使っていない商店などを活用している。

Q：ひきこもり支援ステーション事業の立ち上げでアプローチしたことは。

A：2 点あるかと考えるが、1 つは、市内の専門職の方の力が必要。2 つは、府内の関係各課との調整。

【 考察 】

湖南市は、ひきこもり支援ステーション事業を令和6年度からスタートさせており、まだ1年ほどしか経過していない中で、今回、視察の機会をいただいた。

ひきこもり支援は、丁寧に相手の心に寄り添う支援であるため、支援を行うに当たっては、専門の人材確保の課題、役割や取組を明確にする課題等があると感じた。

当然ながら、どこまでも当事者目線での支援を図る必要があると感じるが、本人と家族間の温度差、ギャップ等をどう埋めながら、本人の自律に向けた環境につなげられるかのハードルが高く感じ、湖南市の取組に驚いた。

8050 問題が騒がれ出してから久しいが、国民の高齢化率が高くなっていることを考えると、親亡きあとの不安は尽きないものと想像に難くない。ひきこもり本人の支援だけではなく、その親の不安解消にも努める施策を進めている現状を知る良い機会となった。

湖南市のひきこもり支援を参考にし、今後、本市においても、より良い環境を整えていくことにつなげてまいりたい。

▼研修の様子 1



▼研修の様子 2



▼湖南市議会議場にて



令和7年8月25日（月）

フリースペースなとりの利用実績記録（名取市）

1. 利用実績について

	全体の利用実績			名取市の利用実績	
	開所日数	延人数	実人数	延人数	実人数
令和2年	73	46	9	34	7
令和3年	139	173	10	85	5
令和4年	143	212	10	94	5
令和5年	146	323	16	105	8
令和6年	141	326	10	102	6

2. 利用者の年代別人数（令和2年～6年度）

*利用開始時の年齢で集計

	10代	20代	30代	40代	50代
男	2	1	3	2	1
女	0	2	1	1	0
計	2	3	4	3	1

*男性9名、女性4名 計13名が登録利用。

*登録をせずに利用→男性9名、女性2名 計11名。

*令和7年度30代男性、10代女性が新たに利用登録。50代女性が体験利用中。

3. 利用のきっかけ

家族や知人の紹介	1
医療機関の紹介	1
市町村の紹介	1
その他の機関の紹介①名取市保健センター	2
その他の機関の紹介②名取市社会福祉協議会「なとりソーシャルサポートセンター」	4
その他の機関の紹介③宮城県ひきこもり地域支援センター南支所	3
その他	1
合計	13

4. 名取市のニーズ

5. フリースペースなとりの取り組み

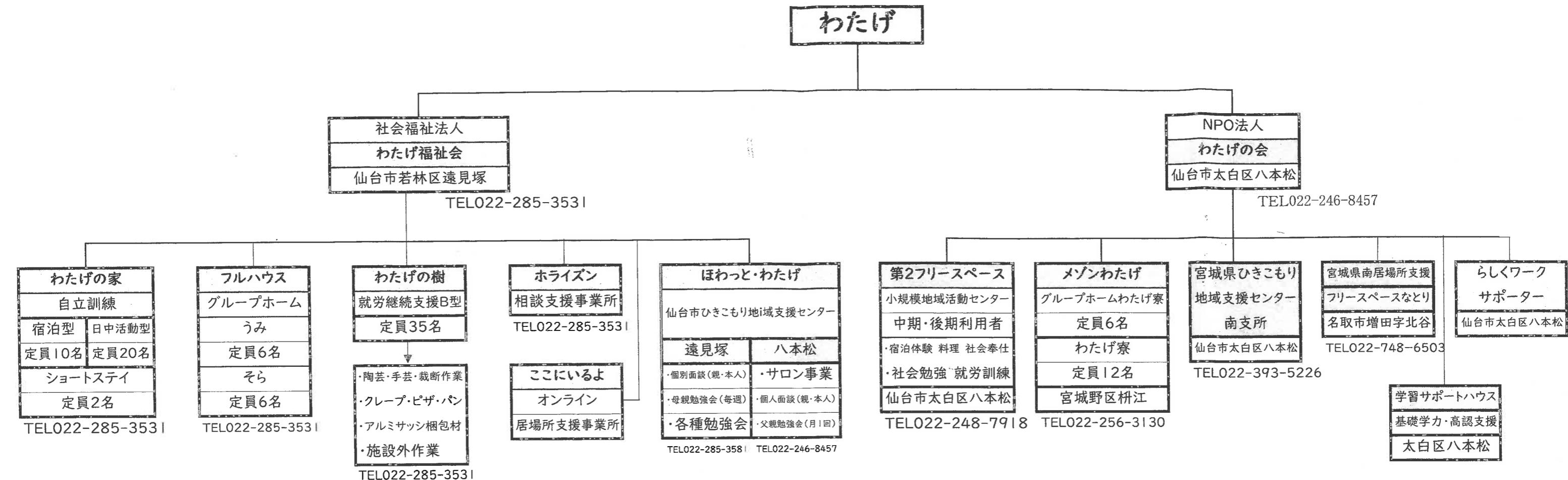
6. 他市町村の取り組み（大郷町・大和町・大衡村・丸森町・利府町）

7. その他

*宮城県ひきこもり地域支援センター南支所相談状況（男性5名、女性3名 計8名）

作成者：フリースペースなとり 藤森 邦枝

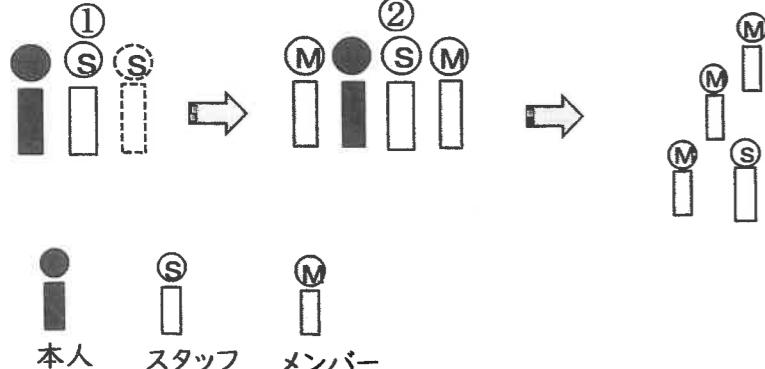
わたげの全体組織図(ひきこもり・ニート・障害者支援)



わたげの支援

- 母親教室 月3回 13時～16時
- 父親教室 月1回 14時～17時 懇親会あり
- 家族一泊研修(家族+わたげスタッフ)
- 個人面談 月1～2回 1Hr 要予約
- 障害別勉強会 月1回 13:00～

本人支援



→ 訪問支援 訪問者・回数随時変更

↓ 日中活動

- ・スポーツデー(毎週木曜日)
フットサル バドミントン バレー 筋トレ
- ・社会体験
ショッピング カラオケ 釣り 自由研究
サイクリング 居酒屋 ボーリング他
キャンプ ビリヤード ダーツ

→

本人支援

- ・書き初め スノーボード
- ・恵方巻き・バレンタイン(ホワイト)デー
- ・フットサル大会(わたげ杯)
- ・スタッフ、メンバー研修会
- ・旅行(1泊～3泊)・島合宿
- ・父親の会交流レクリエーション
- ・フォーラム
- ・クリスマスパーティ

↓ 年中行事

元気回復

仲間が出来る

本人の意識改革

学習支援

- ・高校卒業程度認定試験支援
- ・高校受験支援
- ・専門学校受験支援
- ・大学受験支援
- ・通信高校学習支援
- ・基礎学力学習支援
- ・社会勉強

挑戦

社会復帰 復学・進学

就労支援

- ・就労訓練・体験(施設外)
- ・病院カルテ整理
- ・病院資材調達業務
- ・寺院清掃・草取り作業
- ・店舗接客・発送業務
- ・クリーニング店提携業務
- ・レストラン補助業務
- ・一般家庭清掃・草刈
- ・駐車場清掃・管理他

挑戦

社会復帰 アルバイト・就職

課題

- ・企業経営者の理解
- ・新たな就労体験の場の開拓
- ・わたげ自体の事業の展開